

「タイ仏教史における連続と変化」

石井 米雄

われわれは、タイ国における南方上座部仏教の中に、「出家仏教」、「功德追求型在家仏教」、「攘災招福型在家仏教」という、相異なる宗教形態を識別する。したがって、タイ仏教における変化と連続を理解するためには、まず、これら三形態の宗教の相補的結合の様式と、その結果成立した「タイ仏教」なるものの構造を解明しなければならない。

「出家仏教」は、人間が、自己鍛練によって「苦」よりの解脱を完成させる、という教義上の要請から発達したものであって、定義上、現世否定的 (Iokuttara) である。「功德追求型在家仏教」とは、民衆における宗教の実践形態であって、輪廻転生の世界よりの解脱を求めず、功德をもたらし善業の実践によって、現世的幸福を追求する。(Iokiya) 「攘災・招福型在家仏教」もまた、民衆における宗教実践の形態であるが、呪術的傾向が顕著であって、パリッタ經典の誦唱によって幸福を増進し、災禍より身を守ろうとするものである。

行い正しき出家者の構成する、清浄なるサンガは、「無上の福田」として、民衆の善業のこよなき対象とされる。この「福田思想」を媒介として、「出家仏教」と「在家＝民衆仏教」との間に、「共生」の関係が成立する。すなわち、「福田」であるサンガは、民衆に功德を積む機会を与え(→ 功德追求型) 呪術の執行によってかれらにその靈力を分与する。(→ 攘災・招福型) また、非生産的な出家者団体であるサンガは、在家者(国王～民衆)の支持によって、安定的存在を持続する。

「国家仏教」は、こうした構造をもつ仏教が、国家的保護を受けている状態をいう。タイ国王は、伝統的に、「仏教の擁護者」として自らを規定する。国王は、サンガに物質的保護を与えることによって、サンガの「清浄性」を維持し、「福田」としての存在を保証するが、同時に、「清浄性」を失おうとするサンガには制裁を加える。国王によるサンガの「擁護」は、支援と統制という両側面から検討する必要がある。

「国家仏教」としてのタイ仏教の存在形態は、すでにスコータイ刻文中にその原型を求めることができるものであるが、この形態はその基本的性格を変ることなく、今日に及んでいる。近代化の進展にともなう法律制度の整備とともに、国家のサンガに対する統制はむしろ強化の方向に向っている。〔1902年、1941年、1962年の各サンガ法参照〕

こうしたタイ仏教の基本的存在様式には、最近にいたり、微妙な変化の徴候が現れ始めている。

これは都市部における宗教無関心層の増大、伝統的社会において僧の果していた社会的役割の減退これに対するサンガ側の危機感などによってもたらされたものである。サンガの中に現われた変化としては、「タンマトット」の派遣などに見られる地域社会との連帯を強めようとする動き、「タンマチャーリック」などの派遣に見られる国家政策への積極的協力、マスメディアを利用したの宣教活動の強化、「日曜学校運動」の推進、伝統的な「森林部」の復活運動、などがある。また、在家の側からの新しい動きとして、「青年仏教会運動」、出家者との共同による「仏教セミナー：現代社会と仏教」などの開催、マハーニカイ・タムユット両派の協同推進を目指した研究会の開催などが注目される。

(この報告のうち、仏教の構造にかんする部分は、「アジア経済」に発表の予定。)

インドネシアに於ける < 民族史 > 確立 のための試み —— 史観と歴史叙述 ——

(1) 第一回全国歴史学セミナー

土 屋 健 治

植民地時代のインドネシア民族運動は、スカルノの主張に於いてもっとも明確に示されていたように、植民地支配によって奪われてしまった民族の歴史を自らの手に取り戻そうとするものであった。独立を達成したインドネシアが、自民族の歴史を自ら再叙述しようとすることは、民族的要請であった。インドネシア共和国の諸大学に歴史学科が設置され歴史教育と歴史研究が開始され、歴史学者が育ち始めるのは、1950年代に入ってからであるが、それとはほぼ時期を同じくして、全国的な規模で、歴史学の諸問題を討議しようとする気運がもり上り、それは、1957年12月にジョクジャカルタの国立ガジャ・マダ大学で開催された「第一回全国歴史学セミナー」として具体化した。当時ガジャ・マダ大学総長であったサルジトは、セミナー開催に当って、「オランダ植民地時代、小学校では歴史教育は行われなかった。中学校の歴史教育は、オランダ史に関する教育であって、我々が学んだのは、オランダの英雄たちの物語についてであった。」と回想していたが、ここに端的に示されているように、このセミナーが目指していたのは、共和国の国民が学ぶにふさわしい教科書を作成しようとするものであった。しかし、セミナーで実際に討議されたのは、<インドネシア民族史>に関するより一般的な諸問題についてであり、いずれか一つの見解がセミナー全体の結論として採択されることはなかった。従って具体的に歴史書が執筆されるころまでは至らなかった。しかし、このセミナーに出席した人々の共通の認識は、「インドネシア共和国の成立に至